

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 藤原克己

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



『徒然草』の〈貧〉と〈閑〉の思想 (一)

藤原 克己

※『徒然草』は、小川 剛生 訳注の角川文庫 (2015) を奨めます。

◎貨幣と人間―『徒然草』第二一七段

或る大福長者の云はく、「人は万をさしおきて、ひたふるに徳をつく(付く?/築く?)べきなり。貧しくは生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかんと思はば、すべからく先づその心遣ひを修行すべし。その心と云ふは他の事にあらず。①人間常住の思ひに住して、仮にも無常を觀ずる事なかれ。これ、第一の用心なり。次に、万事の用を叶ふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に随ひて志を遂げんと思はば、百万の錢ありといふとも、暫くも住すべからず。②所願は止む時なし。財は尽くる期あり。限りある財をもちて、限りなき願ひに随ふ事、得べからず。③所願心にきざすことあらば、我を滅ぼすべき悪念来たりと、固く慎み恐れて、小要をも為すべからず。次に、錢を奴の如くして使ひ用ゐる物と知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く神の如く畏れ尊みて、従へ用ゐる事なかれ。次に、恥に臨むといふとも、怒り恨むることなかれ。次に、正直にして約を固くすべし。この義を守りて利を求めん人は、富の来たること、火の燥けるに就き、水の下れるに随ふが如くなるべし。④錢積りて尽きざる時は、宴飲声色を事とせず、居所を飾らず、所願を成ぜざれども、心とこしなへに安く樂し」と申しき。

そもそも、人は所願を成ぜんがために財を求む。錢を財とする事は、願ひを叶ふるが故なり。所願あれども叶へず、錢あれども用ゐざらんは、全く貧者と同じ。何をか樂しびとせん。この掟は、ただ人間の望みを断ちて、貧を憂ふべからずと聞こえたり。欲を成じて樂しびとせんよりは、如かじ、欲(財)なからんには。⑤癰疽(悪性腫瘍)を病む者、水に洗ひて樂しびとせんよりは、病まざらんには如かじ。ここに至りては、貧富分く所なし。究竟は理即到し。⑥大欲は無欲に似たり。

*「究竟」「理即到」：天台大師 智顛(五三八〜五九八)の『摩訶止観』に説く悟達の六段階(六即)の最高位と最下位(初段階) 岩波文庫『摩訶止観』上巻 65 頁以下参照。前田育徳会編『国宝 宝積經要品 高野山金剛三昧院奉納和歌短冊』(勉誠出版 2011)に見える兼好の歌に「理即到より究竟に至る仏こそひとつ心の玉と見ゆらめ」。

☆兼好(1283?~1352?)の生きた十四世紀から十五世紀にかけて、大量の錢を陶甕に入れて埋蔵することが盛んに行なわれ、そうした大甕が全国各地で発掘されている。なかでも最大級のものが函館近郊の志海苔遺跡から出土した、十四世紀末(Or 十五世紀前半)に埋蔵されたと推定される大甕。宋錢を主として三十七万四千枚余り(東野治之『貨幣の日本史』朝日選書 1997)。また講談社・日本の歴史⑭『周縁から見た中世日本』第一部「北の周縁、列島東北部の興起」(大石直正)、三上隆三『渡来錢の社会史』(中公新書 1987)、参照。

○頓阿『続草庵集』から

世の中しづかならざりし頃、兼好の許より「米たまへ。銭もほし」といふことを
沓冠くつがぶりに置きて、

よも涼しね覚めのかかりほ、(仮庵)た枕たまくら(手枕)もま袖も秋にへだてなきかぜ、

返し、「米はなし。銭少し」

よるも憂しねたくわがせこはては来ず(す)なほざりにだにし、ばし訪とひませ、

○鎌倉幕府引付衆の一員であつた青砥左衛門は、質素な暮らしぶりとは廉直で硬骨な人柄によつて聞こえた人物であつたが、ある夜うつかり滑河なめりがわに落としてしまった一文銭十枚を、五十文で買った続松たいまつ十把を灯して一枚残らず川底から拾い上げたのであつた。「小利大損」ではないかと言つて笑つた者たちに、彼は次のように答えたという。「さればこそ御辺達は愚かにて、世の費つひえをも知らず、民を恵む心なき人なれ。銭十文は、只今求めずは、滑河の底に沈みて永く失せぬべし。某それかしが続松を買はせつる五十の銭は、商人の家に止まつて永く失すべからず。我が損は商人の利なり。彼と我と何の差別しやべつもある。彼此六十の銭一をも失はず。豈に天下の利に非ずや」と(『太平記』卷三十五の「北野通夜物語」)

○貨幣と時間―『徒然草』第一〇八段

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚かなるか。愚かにして怠る人のために言はば、一銭かろ軽しといへども、これを重ぬれば、貧しき人をも富める人となす。されば、商人あきびとの一銭を惜しむ心切なり。刹那覚えずといへども、これを運びて止まざれば、命を終ふる期こたちまちに至る。

されば、道人だうにんは、遠く日月を惜しむべからず。ただ今の一念、むなく過ぐることを惜しむべし。もし人來りて、わが命、明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何事をか頼み、何事をか営まん。我らがいける今日の日、何ぞその時節に異ならん。一日のうちに、飲食おんじき、便利べんり、睡眠すいめん、言語ごんご、行歩ぎやうぶ、やむ事を得ずして、多くの時を失ふ。そのあまりの暇いとまいくばくもならぬうちに、無益むやくの事をなし、無益の事を言ひ、無益の事を思惟しゆいして、時を移すのみならず、日を消し、月を互わたりて、一生を送る、もつとも愚かなり。(下略)

☆マックス・ヴェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』第一章の二「資本主義の『精神』」の中で、「時は金なり」というフランクリンの言葉を、西欧近代の資本主義の精神の古典的な表現として引用。

☆真木悠介『時間の比較社会学』(岩波書店 1981) 第三章の二「ヘレニズム―数量性としての時間」で指摘されているように、「万物を否応もなしにひとつの等質化された尺度の上に順序づける」貨幣の「普遍化する力」は、時間の質をも変えずにはおかない。そこに現

れるのは、無限に直線化され、均質化され、数量化された不可逆な時間である。それは無常観をも変質させたであろう。

★五味文彦『中世のことばと絵』（中公新書 1990）「七、兼好の素顔」：「これほどに有徳人の存在に注目し、その言に耳を傾け、称揚する文芸というのが、これまでにあつたらうか」（88頁、傍線藤原）として、兼好は当時新興の「土倉」と呼ばれた金融業にたずさわっていたのではないかと推測。永積安明『徒然草を読む』（岩波新書 1982）も、この大福長者の言葉を兼好の「聞き書き」とし、こうした新興の有徳人たちをも『徒然草』の視界の中に収めた点では兼好を評価しつつも、彼らの蓄銭哲学を批判した後段については、「けつきよく兼好は、大福長者の説く致富思想の内容を、正面から把握することなく、形式的な論理操作のはてに、相対世界の無差別という絶対的な観念論の世界へ逃げ込んでしまっている」（169頁）として、旧貴族階層に属する兼好の限界を説く。三上隆三前掲書も「ヘリクツ」と（66頁）。

☆この大福長者の言葉は兼好の仮構したものであろう。

②は『莊子』養生主篇の「吾が生や涯有り。而して知や涯無し。涯有るを以て涯無きに随うは、殆きのみ」という言葉を模したもの。

③は『徒然草』第二四一段の「所願を成じて後、暇ありて道に向かはんとせば、所願尽きるべからず。（中略）所願皆な妄想なり。所願心に來たらば、妄心迷乱すと知りて、一事をもなすべからず。直ちに万事を放下して道に向かふ時、障りなく、所作なくて、心身永く閑かなり」の傍線部に酷似。

☆①人間常住の思ひに住して、仮にも無常を観ずる事なかれ」。：貨幣は、具体的な何かと交換されて、何らかの願望や必要を充たしたときにはじめてその価値を実現するもので、貨幣それだけの価値は抽象的・潜勢的なものにすぎない。大福長者の教えは、貨幣が現実的な価値を実現する機会を無限の将来へと先延ばしするのであるから、たしかにそれは人間常住ということを大前提としなければ成り立たない。兼好は、鎌倉時代の貨幣経済の進展に伴って出現した、何か現実的具体的な欲求を満たすためではなく、ただひたすら貨幣のために貨幣を貯めるといふ、まったく新しいタイプの人間に目をみはり、そのような人間類型を「理念型」（ヴェーバー）化している。しかも貨幣欲は、現実的な欲求の対象を持たないだけに、原理的に無限大でありうる。↓⑥「大欲は無欲に似たり」

※藤原「鎌倉時代における白詩受容とモラリスト文学の形成―長明・無住・兼好―」（小島孝之編『説話の界域』笠間書院 2006）参照

○『徒然草』第九三段―生きていくということにおのずから備わっているよろこび

「牛を売る者あり。買ふ人、明日その値をやりて牛を取らんといふ。夜の間に牛死ぬ。買はんとする人に利あり。売らんとする人に損あり」と語る人あり。これを聞きて、かたへなる者のいはく、「牛の主、まことに損ありといへども、また大きな利あり。その故は、生あるもの、死の近きことを知らざること、牛すでにしかなり、人もまた同じ。

はからざるに牛は死し、はからざるに主は存ぜり。一日の命、万金まんきんよりも重し。牛の値、鷺毛がもうよりも軽かろし。万金を得て一銭を失はん人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲あざけりて、「その理ことばりは、牛の主に限るべからず」といふ。(スルト、「カタヘナル人」ノ) またいはく、「されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命のよるこび、日々に楽しまざらんや。愚かなる人、この楽しびを忘れて、労いたづかはしく外ほかの楽しびを求め、この財たからを忘れて、あやふく他の財をむさぼるには、志満つことなし。生ける間あひだ、生を楽しまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人皆な生を楽しまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るるなり。もしまた、生死しやうじの相にあづからずといはば、実まじの理を得たりといふべし」といふに、人、いよいよ嘲る。

☆大福長者は、生きることを無限に先送りせよと説くのに対し、兼好は今ただちに生きよと説いている。

⑥ 大欲Ⅱ 悪性腫瘍の比喩

○『徒然草解釈大成』(岩崎書店 1966)によれば、貞享三年(1686)頃に成った黒川由純(生没年未詳)の『徒然草拾遺抄』は、『俱舍論』(五世紀中葉、インドの世親著)に「誰か智有る者の、水を瀝そそぎて癰を澆すすぐに少樂の生ずる有れば、癰を計して樂と為さんや」(『大正新修大藏經』第二十九卷 114頁)を引く。

※プラトン『ゴルギアス』に「(ソクラテス)人が疥癬にかかって、かゆくてたまらず、思うぞんぶんいくらでも搔かくことができるので、搔きつづけながら一生をすごすとしたら、これもまた幸福に生きることだと言えるのかね？」(藤沢令夫訳「ゴルギアス」『世界の名

著 6 プラトン』中央公論社 1966・330頁)

(藤原補足資料) 現代社会を考えるために

◎Erich Fromm : *To Have or to Be ?* (1976) , ABACUS edition, 1979.

*フロムは1900年ドイツに生まれ、1933年ナチのユダヤ人迫害によってアメリカに亡命。1980年没。スイスのマジョーレ湖に散骨。だから墓はない。

フロムは大量生産・大量消費型社会に適合的な生き方を所有志向型 **Having Mode** とし、それに「在る様式 **Being Mode**」の生き方を対置して、資源枯渇、環境破壊の終末的破局を回避するためには(私たちがこんにちの資本主義社会を人間的に制御してゆくためには)、私たち自身の生き方が、所有志向型の生き方から、「在ること」の充実を求める生き方に変わらなければならないと論ずる。「在ること」の充実とは、感ずること、愛することといった人間的な諸能力を十全に活かしてより深く生きること、何かを手に入れてからではなく、ただちに今ここに生きること、人生のさまざまな過程そのものを生きること、である。そのように生きることをフロムは生産的能動性 **productive activity** という。

A painting or a scientific treatise may be quite unproductive, i.e., sterile; on the other hand, the process going on in persons who are aware of themselves in depth, or who truly "see" a tree rather than just look at it, or who read a poem and experience in themselves the movement of feelings the poet has expressed in words – that process may be very productive, although nothing is "produced". Productive activity denotes the state of inner activity. (V. What is the Being Mode? Erich Fromm, *To Have or to Be ?* Harper & Row 1976, p.91 下線藤原)

絵や科学論文でも、まったく非生産的、すなわち不毛であるかもしれない。一方、自分自身を深く意識している人物、あるいは一本の木をただ見るだけでなく、ほんとうに〈観る〉人物、あるいは詩を読んで、詩人が言葉に表現した感情の動きを自己の内部に経験する人物の中で進行している過程——その経過は何も〈生産〉はしないが、大いに生産的でありうる。生産的能動性は、内的能動性の状態を表わす。(佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊國屋書店 1977、p.131 下線藤原)

To Have or to Be? 補足

○君がより少なく存在すればするほど、君が自分の生命を発現させることが少なければ少ないほど、それだけより多く君は所有することになり…(マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波文庫 1964、154 頁、下線藤原)

Je weniger du *bist*, [...] umso mehr *hast* du… = The less you *are*, the more you *have*.

○「^{これ}之を知る者は、之を好む者に ^し如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。(知之者、不如好之者。好之者、不如樂之者)」(『論語』雍也篇の孔子の言葉)

○春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり (古今集・春下・よみ人しらず)

○《この腕に抱きとめた者はすべて失った。／ただ君だけがぼくのなかで、いつも新たに生まれ変わる。／ぼくは君をつなぎ留めなかったから／しっかりと君を保つ。Ach, in den Armen hab ich sie alle verloren,/du nur, du wirst immer wieder geboren:/weil ich niemals dich anhielt, halt ich dich fest.》(リルケ『マルテの手記』の詩)

○Viktor E. Frankl, *...trotzdem Ja zum Leben sagen : Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*, (1947), Kösel-Verlag, 2005.

*邦訳：霜山徳爾訳『夜と霧』(みすず書房 1956)

その若い女性は、自分がもう幾日も生きられないことを知っていた。にもかかわらず、私が彼女と語り合った時、彼女は晴れやか (*heiter*) だった。「私は、運命が私をこんなにひどい目に遭わせてくれたことで、運命に感謝しておりますの」と、彼女はこの言葉どおりに語ったのだった。「だって、以前の私のブルジョア的な生活では、私はあまりにも甘やかされており (*verwöhnt* : 贅沢三昧の、とも)、精神的な向上ということ (mit meinen *geistigen Ambitionen*) たしかに私はあまり真剣に考えておりませんでしたもの」と。その最後の日々、彼女はまったく内面の世界に生きていた (*ganz verinnerlicht*)。「ほら、あの樹が私の孤独の中で唯一の友達ですの。」と彼女は言って、病室の窓の外を指さした。窓の外に、一本の柵の木 (*Kastanienbaum*) が立っていて、今まさに花盛りだった。病床の上に身をかがめると、ちょうどその小さな窓のすぐ外に、青々と葉を茂らせた枝が二本の蠟燭状の花穂をつけているのが見えた。「私、よくあの樹と話をしますの」と彼女は言った。私は腑に落ちない気がして、彼女の言葉をどう解してよいのか分からなかった。彼女は精神に変調をきたして、一時的な幻覚に陥っているのではないか。そんな疑念にかられて私は、樹のほうでも彼女に答えたのかどうかと尋ねてみた。「え、答えたのですって？」—「いったい樹は彼女に何と言ったのか。彼女は答えた。「樹はこう言いましたの。私はここにいます。私は—ここに—います。私は命だ。永遠の命だ…」(藤原訳)

Diese junge Frau wußte, daß sie in den nächsten Tagen werde sterben müssen. Als ich mit ihr sprach, war sie trotzdem heiter. »Ich bin meinem Schicksal dankbar dafür, daß es mich so hart getroffen hat«, sagte sie zu mir wörtlich; »denn in meinem früheren, bürgerlichen Leben war ich zu verwöhnt und mit meinen geistigen

Ambitionen war es mir wohl nicht ganz ernst«. In ihren letzten Tagen war sie ganz verinnerlicht. » Dieser Baum da ist der einzige Freund in meinen Einsamkeiten«, meinte sie und wies durchs Fenster der Baracke. Draußen stand ein Kastanienbaum gerade in Blüte, und wenn man sich zur Pritsche der Kranken hinabneigte, konnte man, durch das kleine Fenster der Revierbaracke, eben noch einen grünenden Zweig mit zwei Blütenkerzen wahrnehmen. »Mit diesem Baum spreche ich öfters«, sagt sie dann. Da werde ich stutzig und weiß nicht, wie ich ihre Worte zu deuten habe. Sollte sie delirant sein und zeitweise halluzinieren ? Darum frage ich neugierig, ob der Baum ihr vielleicht auch antworte – ja ? – und was er ihr da sage. Darauf gibt sie mir zur Antwort : »Er hat mir gesagt : Ich bin da – ich – bin – da – ich bin das Leben, das ewige Leben... « (S.106-7) * 網掛けの部分は私には意味が正確に取れない箇所 (下も同じ)。

*

*

強制収容所の中で、人間が外的にだけでなくその内的生活においても退行的に陥ってゆく (zurückgeworfen ist) あらゆる原始性にも関わらず、散発的 (sporadisch 稀に?) にではあったが、内面化への顕著な傾向の端緒が認められた。精神的に生き生きとした生活が送れるように生まれついた感じやすい人間は、それゆえに時として、その相対的に柔弱な気質にも関わらず、収容所生活のかくも困難な外的状況を、もとよりそれは堪え難いものであったけれども、しかし精神的な面ではそれほど破壊的なものとしては経験しなかったのである。というのも、まさに彼らには、恐ろしい周囲の世界から退却し、精神の自由と内面的な豊かさの内に立てこもる道が開かれていたからである。そう考えれば、いなそのように考えることによつてのみ、しばしば頑健な者たちよりも繊細な性質の人間のほうが収容所生活をよりよく堪えることができたというあのパラドックスが理解されるのである。(藤原訳)

Trotz aller Primitivität, in die der Mensch im Konzentrationslager nicht nur äußerlich, sondern auch in seinem Innenleben zurückgeworfen ist, machen sich, wenn auch sporadisch, doch Ansätze bemerkbar im Sinne einer ausgesprochenen Tendenz zur Verinnerlichung. Empfindsame Menschen, die von Haus aus gewohnt sind, in einem geistig regen Dasein zu stehen, werden daher unter Umständen trotz ihrer verhältnismäßig weichen Gemütsveranlagung die so schwierige äußere Situation des Lagerlebens zwar schmerzlich, aber doch irgendwie weniger destruktiv in bezug auf ihr geistiges Sein erleben. Denn gerade ihnen steht der Rückzug aus der schrecklichen Umwelt und die Einkehr in ein Reich geistiger Freiheit und inneren Reichtums offen. So und nur so ist die Paradoxie zu verstehen, daß manchmal die zarter Konstituierten das Lagerleben besser überstehen konnten als die robusteren Naturen.